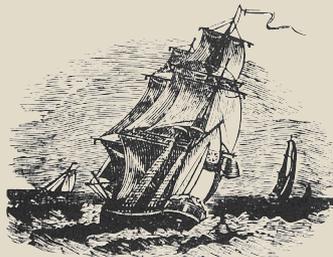


# 羅針盤



## 膠原病の皮疹のみかた

佐藤 伸一

*Shinichi Sato*

東京大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授

膠原病の皮疹は全身に現れるため、もちろんわれわれ皮膚科医は全身の皮膚を観察しなければならない。しかしながら、限られた診察時間の中で、いかに効率よく膠原病に関連する皮疹を見つけ出すか、そしていかに皮疹を見落とさないようにするかについては戦略をもつ必要がある。膠原病の皮疹は、幸いなことに露出部である顔面と手に多い。したがって、まず顔と手に意識を集中して膠原病の皮疹を探するのがもっとも

効果的な戦略であるといえる。しかし、顔と手以外は観察しなくてもよいということではない。顔と手に皮疹がなくても、その他の症状から膠原病が疑われる場合には積極的に全身の皮膚を観察してほしい。

次に重要なことは、顔や手にどのような皮疹があるかということ、あらかじめ予想しつつ、その皮疹を意識して見ようと努めることである。ただ単に顔と手を見ても膠原病に関連する、とくに小さな皮疹は容易に見落としてしまう。このような「見れども、見えず」に十分注意を払う必要がある。これを避けることはそれほど難しいことではない。本特集号で取り上げる手と顔の皮疹をまず全部暗記することである。暗記できない場合には、本誌を診療の傍らにおいて、それを参照しながら、顔と手の皮疹の一つ一つについて、それがあかないかを丁寧に観察することである。慣れれば、ほとんど時間をかけずに膠原病の皮疹をスクリーニングすることができるようになるであろう。

本特集号で取り上げた皮疹は、どれも重要かつ高頻度



のものであり、珍しく奇をてらった皮疹は取り上げていない。たぶん読者は、「何だ、当たり前」の皮疹ばかりじゃないか。これならすでに知っている」と思われるかも知れない。しかし、そうではないのである。前述したとおり皮疹を知っていることと、それを意識して観察することは別のことである。いくら皮疹を知っていても、「見れども、見えず」でしばしば見落としてしまうのである。例えば、強皮症関連病態で高率に陽

性となる爪上皮出血点は爪の甘皮の小さな出血点であるが、これは皮疹そのものが数 mm 以下と小さいため、意識してそれを見ようとしなくても、自然に目に入ってくるものではない。自分では「見れども、見えず」ではなく、「見て、見えている」はずとどうしても思いがちである。また、皮膚筋炎の特徴的な皮疹として最近報告が増えている *mechanic's hand* (機械工の手) は 1979 年に報告されたものであり、決して最近発見されたものではない。しかし、なぜ最近になって報告が増えてきたのであろうか？ その一つの理由として、この皮疹が見逃されていたことが考えられる。実際、私自身この皮疹を見逃していた。この皮疹を知り意識して見ようとした結果、*mechanic's hand* は決して発生頻度の少ない皮疹ではなく、見ようとする姿勢がなかったために見逃していたと認識するにいたった。

膠原病の皮疹について、「見れども、見えず」を回避するため、本特集号が少しでもお役に立てれば幸いである。